



静かな教室が雄弁に語ること

体育の後、スナックタイムの後、給食の後。

第 1 クォーターが始まったばかりの頃は、毎日のように山ほどの物やゴミが教室の床に落ちていました。

これは、決して誇張した表現ではありません。

それは、誰よりも子どもたちがよく分かっていると思います。

スナックのゴミ、割りばしの袋、着替えた後の靴やシャツ。

そこかしこに落ちていた物の様子を見て、私はどのような“ステップ”を踏んでいくかを考えました。

最初は、「私が声をかけて綺麗にする」段階としました。

これは、あっという間にクリアできました。

このファーストステップも、「素直さ」という名の力が無ければクリアすることは難しいです。

その次に、「私が声をかけずに綺麗にする」段階にチャレンジしました。

意図的にスナックタイムや体育の準備時間などから私は距離を置くようにし、自分たちの力だけで教室がどの程度綺麗にできるかに挑戦したのです。

このセカンドステップは、中々時間がかかりました。

声をかけられれば気づくけど、そうでなければ気づけない。

この状態が、しばらく続きました。

そのうち、言われずとも気づいて動く子たちが出始めます。

そして、自分の所だけでなく、他の人の片付けや整頓を手伝う子たちも出始めました。

教室は、次第に綺麗になっていきました。

今では、「物が床に落ちている状態」が日常ではなく非日常になりました。

「散らかすこと」が「恥ずかしいこと」であることを感じられる風土も徐々にできてきたように思います。

私は、今でもみんなが他の教室に行っている時の教室の写真を撮ります。

みんなのいない教室は、みんながいた時のことを雄弁に語ってくれます。

改めて書きますが、最初はたくさんの椅子が出ていました。

ごみもどっさり落ちていました。

ロッカーの本も横倒しになっていました。

つまり、私がいなければそういう風に教室を使ってしまうということです。

これは、本当の力ではなく仮初めの力と言えるでしょう。

「私がいる」という条件の下でしか発動しない力なのですから。

もちろん、数人の子は丁寧に物を扱っている訳ですが、結局それは「個人」としての話です。

「チーム」として、この教室をどう使えばいいかという意識にはまだまだ至れていないことがこれまでの課題であったということです。

私は、次のことを教室で繰り返し伝えてきました。

教室にあるものは、基本的に「借りているもの」です。

「使わせてもらっているもの」とも言えます。

机もそうです。

椅子もそうです。

本棚の本もそうです。

何なら教室という場所ですらそうです。

借りているものですから、最後は返します。

そして、来年の4年生たちが使います。

当然、全ての物にはお金もかかっています

机も椅子も本棚も教室もそうです。

そのお金は、お父さんやお母さんが働いて納めてくれたお金です。

みんながかしこく・かっこよくなるようにと、汗水たらして一生懸命働いて得たお金の中から少しずつ出し合ってくれているわけです。

つまり、使えるのは「当たり前」ではないんですね。

とても、「有難い」ことなんだといえます。

どんなことでもそうですが、「当たり前」と思うと使い方は粗くなります。

「自分の物」と認識すると、さらにぞんざいな使い方になります。

でも、「有難い」ことが分かると使う時に感謝の気持ちが湧いてきます。

「借りている物」と認識すると、さらに丁寧な使い方になります。

私はこれを「マイカー・レンタカー理論」と呼んでいます。

借りている車だと丁寧な運転になり、自分の車だとやや運転が荒くなる。

でも、突き詰めて見れば、車を作ったのは自分ではありませんし、鉄やガソリンを生んだのも自分ではありません。

ちょっと哲学的な話になりましたが、要はこの世に存在するすべての物を「当たり前」とみるか「有難い」とみるかで景色が一変するということです。

元気に学校に来れることも、家族でごはんが食べられるのも、毎日仕事ができるのも、当たり前では決してないですよ。

つい、先日のことでした。

移動教室で、みんながいなくなった4-1に来た私は、驚きました。

机は、綺麗に整頓されていました。

椅子も、全て美しく入っていました。

ゴミもほとんど落ちていませんでした。

重箱の隅をつつくようにすれば、ほんの幾つかは発見できますが、それをしなければ「皆無」と言っているほどの状況でした。

教室が、ピカッと光り輝いていました。

それだけではありません。

ロッカーの本も、一冊もおれていませんでした。

縦に背表紙が見える向きで、揃えて収納されていました。

2つのゴミ箱の中も、空になっていました。

ほこり1つ、入っていませんでした。

誰もいない静かな教室は、雄弁に語ってくれました。

みんなの確かな心の成長を、です。

教室に広がる美しい光景の一つ一つは、次の事実があったことを明確に示していました。

誰かが、誰かの為に、動いた

自分の為だけに動く人ばかりのチームでは、教室はまずこのような素晴らしい状態にはなりません。

本をたおしたのは自分じゃないから。

ゴミを落としたのも自分じゃないから。

机や椅子を乱したのも自分じゃないから。

「自分じゃないから」という理由で利己的に行動する人ばかりの集まりでは、基本的に澱みや汚れは残ったままになります。

落ちたごみを、誰も拾わないからです。

たおれた本を、誰も直さないからです。

以前も書きましたが、最初の出張を終えた後の4年1組は、たくさんのゴミが落ちていました。

机やいすも「整頓」という言葉とは程遠い状態でした。

ゴミ箱には、ゴミがたっぷり入っていました。

本棚の本も、たくさん倒れていました。

その時の様子をハッキリ覚えているからこそ、ピカッとした教室の状態を見て、私はたまらなく嬉しかったのです。

眼下に広がる光景の美しさは、そのままみんなの心の美しさをあらわしているようでした。

そんな日が、これから「日常」になっていけばいいなあと心から思っています。

「有難い」という感覚を忘れずに、大切に感謝して教室を使っていきたい。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

